

令和2年度第1回かわさきパラムーブメント推進フォーラム

- 1 日 時 令和2年10月8日（木）14時00分～16時05分
- 2 会 場 川崎市役所 第3庁舎18階 大会議室
- 3 出席者
 - 【委員長】 福田市長、成田共同委員長
 - 【顧問】 中森顧問
 - 【委員】 遠藤委員、金子様（大塚委員代理）、小倉委員、菊地委員、草壁委員、栗山委員、杉山委員、須藤委員、瀬戸山委員、多田委員、丹野委員、土岐委員、湯浅委員、山崎委員、横島委員
 - 【事務局】 加藤副市長、向坂市民文化局長
（市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室）
原室長、成沢担当課長、井上担当課長、磯崎担当課長、
鴻巣担当課長、太田課長補佐、小池担当係長
永田担当係長、山城職員、小西職員、田中職員
市民文化局コミュニティ推進部 阿部部長
市民文化局市民スポーツ室 山根室長
市民文化局市民文化振興室 山崎室長
教育委員会学校教育部 星野担当部長
- 4 議 題
 - (1) かわさきパラムーブメントにおける主な取組について
 - (2) 英国ホストタウンにおける主な取組について
 - (3) かわさきパラムーブメント推進協議会について
 - (4) その他
- 5 傍聴者 0名

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】 皆さん、こんにちは。定刻になりましたので、ただいまから令和2年度第1回かわさきパラムーブメント推進フォーラムを開催いたします。

議事に入るまでの間、進行は私、オリ・パラ室の原が担当させていただきますのでよろしくをお願いいたします。

まず何点か事務連絡をお伝えさせていただきますけれども、本日のフォーラムでございますが、公開となっておりますので、傍聴を許可しておりますことをあらかじめ御了承いただきたいと思います。また、いつもと同じように、会議につきましては、発言の内容を記録し、発言者の氏名も含めて、後日、市のホームページで掲載いたしますのでよろしくお願いいたします。

次に、配付資料でございますが、お手元に次第から始まった右肩に資料1と書かれたものがございます。次第の後ろが座席表、次に委員名簿、要綱、そしてA3の資料1からですが、最後のページに7ページまで資料があるかと思っておりますので御確認をお願いします。続きまして、別のホチキス留めのA3の資料、右肩に別紙1と書かれた資料でございますけれども、最終ページが11ページまであれば資料が整っていると思っておりますので御確認のほどよろしくお願い致します。それとは別にかわさきハロウィンのA4横の資料、そしてC o l o r sかわさき2020展のチラシ、その後ろにC o l o r sかわさき展の概要を記載したA4のペーパーがあるかと思っておりますが、お手元の資料に過不足等ございませんでしょうか。

続きまして、本日の出欠委員でございますが、委員名簿のとおりでございますが、本日、成田委員長は、皆さん、もう目に入っているかと思っておりますが、リモートでの御出席ということでございます。そして細倉顧問が御欠席となつておるとともに、本日、急遽でございますが、中澤委員が欠席になりましたので御報告をさせていただきます。あと大塚委員も御欠席なんですが、代理で金子様が御出席していただいております。なお、本日、遠藤委員におかれましては、所用がございまして3時半で退席させていただきたい旨を事務局としては申しつけておりますので、皆さん、御理解よろしくをお願いいたします。

また昨年11月に商工会議所の会頭に草壁会頭が新たに就任いたしまして、就任後、今回初めてのフォーラムということでございますので、できれば一言御挨拶をお願いできればと思います。どうぞ、お座りになったままで。

【草壁委員】 会頭の交代ということで就任をさせていただきました。皆様のお役に立てるよう頑張っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】 よろしくお願ひします。

それでは、初めに、福田市長から皆様に御挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

【福田市長】 皆様、改めましてこんにちは。大変お忙しい中、お集まりを頂きまして誠にありがとうございます。成田さん、どっから見えている、あのカメラで撮っているということですか。じゃあ皆様、成田さんにしゃべるときはあっちのカメラ。

ありがとうございます。前回開いたのが11月だから、1年ぐらいたってしまったということで、本来であれば3月に開催する予定であったんですが、それもコロナの関係で延び延びになってしまって、資料だけ皆さんに配付させていただくということでありましたけれども、ようやくこういったときに、今日は出席率もよく、皆さんに御参加いただいたことを本当に心から感謝申し上げたいと思います。

いろいろな条件変更があつて、1年丸々延びてということでもありますけれども、どうやらしっかりと来年の夏には開催、規模というか、どういう形になるのかというのはちょっとあるかもしれませんが、しっかりと開催される見込みであるということであるので、この延期も私たちは前向きに捉えたいと思っています。調査によると、イギリスチームが川崎でベースキャンプを張るといふふうなことも知らない市民の方もまだまだいらっしゃるという意味では、もうあと1年あつて、機運醸成につなげたり、私たちの大事な、何よりも大事なのが、このパラムーブメントの何を目指しているのか、どういう理念なのか、そしてどんなことをやって、みんなでこういった共生社会をつくっていくのかということの浸透を、まだしっかりと取り組める猶予を頂いたと思っておりますので、この機会にさらに取組を進化させていきたいと思っております。

今日は、3月にできなかったことも含めて報告させていただいて、また前に進んでまいりたいと思っておりますので、なるべく説明時間を短くしながら、皆さんの御意見をしっかりと頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】 ありがとうございます。

続きまして、共同委員長であります成田様から皆様に御挨拶を頂ければと思います。よろしくお願いいたします。

【成田共同委員長】 皆さん、こんにちは。私はやはり東京パラが延期になってしまったということで、正直、今年でもう引退する気持ち満々だったんですけれども、そういうわけにはいかなくなってしまって、逆に前向きに考えるようになりました。あと1年トレーニングできるという気持ちでやっていきたいなと思います。

あと先日、友達のほうから、市内に住んでいる友達なんですけれども、パのシールを見たよという声が増え始めて、コンビニとかでも見るようになったし、何か最近、ドラえもんの地元券のほうが大きくなっちゃって、パのシールがちょっと小さく見えちゃうねというふうな友達も多くいて、でもそれだけみんながパラリンピックについて考えているというか、やっぱりパのシールはよかったなと今思っています。あと1年はないんですけれども、もっと川崎を変化させるために皆さんと一緒に頑張っていきたいと思うので、どうぞよろしくをお願いします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】 成田さん、ありがとうございます。

それでは、本会議の進行につきましては、委員長でございます福田市長のほうで務めさせていただきますので、どうぞ市長、よろしく願いいたします。

【福田市長】 ありがとうございます。

成田さんのリモートも全く違和感なく、それだけリモートがすごい進んだ世界にもう既にいるということだと思うんですけれども、よろしく願いいたします。

それでは、資料1について、事務局からの説明をお願いいたします。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 それでは、資料1を御覧ください。オリンピック・パラリンピック推進室の成沢です。よろしく願いいたします。

それでは、資料の1、かわさきパラムーブメントの主な取組について御説明いたします。まず初めに、左側の店舗等におけるかわさきパラムーブメント実践事業バリアフリー情報発信事業でございますけれども、こちらにつきましては、市内店舗のバリアフリー状況の情報発信などを行っていく事業でございます。今、成田委員長からもお話がありましたように、1つはパのステッカーですね、こちら今、市内で754店舗に貼ってございます。

一方で、バリアフリー情報発信事業ということで、これはぐるなびさんと連携しながら、これまで協働で市内の店舗、特に飲食店を中心にバリアフリー調査をしまりまして、現在62店舗がホームページの中で、こういったバリアフリーの情報が発信できているといったところがございます。ただ、課題もありまして、1つには、この754店舗、川崎市のホームページ、パのステッカーは754店舗なんですけれども、川崎市ホームページ

内で一覧になっているんですが、こちらが、一体どこがバリアフリーになっているのかがすぐには分からないという状況になっているといった課題ですとか、その飲食店の62店舗も、川崎市内にたくさん店舗数がある中で、どうしても調査していくには時間とお金もかかるということで、このままではなかなか進んでいかないということがございます。

こうした課題がございますので、今後2つの事業を統合して、情報の発信の一元化を図っていきたいということでございます。そのハード面、今、ハード面の調査を行ってまいりましたけれども、ソフト面も含めたバリアフリー状況をしっかりと発信できるようにするために、市内の店舗が自ら簡便に実施できる「バリアフリー状況確認キット」というものを作成して、こういったものをどんどん市内の店舗で使っていただきたいなと思っております。右下にあります、インフォシート(現行)と書いてありますけれども、自らうちの店はこういったバリアフリーをやっていますよということを書いていただいて、それを自らのホームページなりで発信していただくという取組を検討しております。

次に、右に参りまして、2番目の個人型トップアスリート助成事業でございます。こちらは、このフォーラムで中森顧問の御提案だったんですけれども、障害者スポーツの補装具が一部非常に高額なものがあって、それに対してなかなかパラアスリート、障害者アスリートの負担になっているという御意見がございました。そういったことも踏まえまして、本市では、検討しました結果、既存のスポーツの選手へのいろいろな助成制度等もあるんですけれども、そういったこの兼ね合いも踏まえながら、結果的に障害者スポーツに限らずオリンピック・パラリンピックの種目を対象とした助成制度を設けました。現在のところ、先月まで募集をかけていたんですけれども、6競技9名の方から応募がありまして、現在、その審査を行っているところでございます。

次に、3番の感覚過敏の方を対象としたバリアフリー化事業ですけれども、こちらにつきましては、昨年、サッカー&ユニバーサルツーリズムですとか、あるいはイオンスタイル新百合ヶ丘でクワイエットアワーというものを実施してまいりました。これは感覚過敏の特徴を持つ方が安心してスポーツ観戦あるいは買物ができるようにという取組でございましたけれども、こちらを今年度さらに進めるという形で、この写真にありますようなカーンダウンスペース、こちらはちょっとパニックになりそうなき、あるいはパニックになったときに心を落ち着けるための設備ですが、こちらを公共施設なり商業施設に置けないかということで、現在、取組を進めているところでございます。

次に、4番目の心のバリアフリーに係るエピソード発信事業ですけれども、こちらにつ

きましては、心のバリアフリーというものをしっかり市民の方に理解・実践できるように、自分が町なかで見かけた、自分がこんないいことをしてもらったとか、あるいはこんなふうに心のバリアフリーにつながる取組をしたということを、そういったエピソードを市民の皆さんから集めたいと思っております。ハッシュタグかわさき、例えばかわさき心のバリアフリーという形でハッシュタグをつけてツイートしてもらったり、あるいは市のほう、オリンピック・パラリンピック推進室のほうにメールを頂くような形で、こういった心のバリアフリーのエピソード集というものを作ってまいりたいと考えております。

次の2ページに参りまして、5番目の庁内職員を対象とした心のバリアフリーに関する研修でございます。こちらは市の職員一人一人がバリアフリーについて掘り下げていくと、心のバリアフリーをしっかりと職員に身につけさせるということを目的に実施しております。大きく分けて幹部級の職員と、特に窓口を中心にした職員があるんですけども、幹部級の職員につきましては、副市長及び局長級を対象として、心のバリアフリーに関するワークショップを行いましたといったところと、職員向けの研修につきましては、窓口対応の多い部署の職員にユニバーサルマナー検定3級の研修を開催しております、これは今年度も今後また実施していく予定となっております。

次に、6番目のパラムーブメントアクション（かつてにおもてなし大作戦）ですけれども、こちらにつきましては平成30年度から行っているところですが、本来であれば今年のオリンピック・パラリンピックの年が集大成ということだったんですが、そこに向けてこれまで数々の市民活動をかつてにおもてなしということで目指してまいりました。昨年は全部で53のプロジェクトができたんですけども、実際にはコロナの影響で21プロジェクトのみが実践ということで、その後は中止になってしまったということなんですけど、今年度につきましては、コロナの影響もあってかつてにおもてなしテレビということで、今プロジェクトが進んでおります。こちらにつきましては、後ほど山崎委員から補足で御説明願えればと思っております。

次に、右に参りまして7番目のブリティッシュ・カウンシルとの連携事業ですけれども、こちらにつきましては英国の、湯浅さんの所属されているブリティッシュ・カウンシルと連携して、舞台芸術の取組をここ数年取り組んでいるところなんですけど、昨年度、ドレイク・ミュージックというメンバーにお越しいただきまして、障害があっても音楽に親しむにはどうすればいいかというアプローチをしてまいりました。これは本来、今年のフェスタサマーミュージアムの中で一緒に演奏をしようというところで、そこを目指して取り組んで

きて、実際にそこの表にありますように、ファシリテーター育成トレーニング、これはドレイク・ミュージックのメンバーがいなくても日本の音楽家が障害者と一緒に音楽をつくっていけるようなファシリテーターをつくっていくということですか、特別支援学校に行って実際に音楽づくりをやったりですか、あとは楽器作りのワークショップ、このようなことを昨年度、取り組んでまいりました。繰り返しになりますが、今年、本来であれば演奏会ということだったんですけれども、それがかなわなかったものですから、こちらにつきましても、また来年の実施を目指して、またスケジュールを組み直して取組を進めてまいりたいと考えております。こちらは今の状況を詳しく後で湯浅委員から御説明いただければと思っております。

次のページに参りまして、8番目のインクルーシブなかわさきハロウィン開催の支援ということで、こちらもかわさきハロウィン、車椅子の方のパレードなんかを数年前から行ってきたおりますけれども、今年はコロナの影響で、オンラインの中で実施していくということでございます。こちらにつきましては、後ほど土岐委員のほうから補足いただければと思います。

次に、9番目の助けあいアプリ「M a y i i」（メイアイ）でございます。これにつきましては町なかの移動などで困っている、いわゆる社会的障壁に限らずいろいろなことで困っている方々というか、お互いにサポートできるような、マッチングサポートをするようなマッチングアプリですね、こちらを大日本印刷さんが作りまして、これを本市と提携した中で、そのマッチングアプリを利用して移動困難な方の行動範囲を広げることとか、市民の行動変容を促すためにこういったことを取り組んでまいります。試行実施を今後行ってまいります、川崎、武蔵小杉、武蔵溝ノ口、登戸、新百合ヶ丘の各駅周辺で「M a y i i」のアプリをダウンロードしていた方々の中で助け合いとかが生まれてくることを期待しているところでございます。

次に、10番目のかわさきパラムーブメント関連イベントでございますけれども、こちらにつきましては平成29年からスポーツ、文化それぞれのイベントを行ってきたところでございます。スポーツイベントであるかわパラ2020は、コロナの影響で本来8月実施だったところを来年3月に延期という形で実施したいと思っております。かわさきパラコンサートにつきましては、今年度は中止となっております。

次に、11番目の小学生を対象としたバリアフリーマップ作成なんですけれども、こちらパラムーブメントの機運醸成のために、小学生と一緒にバリアフリーマップを作りま

した。通常は、バリアフリーマップは目的施設へのルートなんかをたどっていくんですけども、今回は聖火リレーの出発式ですとか、事前キャンプの会場である等々力陸上競技場のメインスタンドについてバリアフリーマップを近くの小学生と作りました。特にメインスタンドはバリアフリー法には適合しているんですけども、実際にはどうなのか。例えばこういうドアがあるところが車椅子の方にとってどうなのかとか、スロープもあるけれども、それが車椅子の人にとって本当はどうなのかといった視点で、小学生の中でも体験してもらいながらマップ作りをいたしました。

最後になりますけれども、12番目の心のバリアフリーシンポジウムですが、こちらはJTB株式会社さんと本市との共催で、今年の1月に先導的共生社会ホストタウンの取組ということでいろいろな発表をしていったところでございます。昨年度行ったサッカー&ユニバーサルツーリズムの当事者、参加者の方が登壇していただいて、そのときの感想などをお話いただきました。

簡単ですけども、私のほうからの説明は以上でございます。

【福田市長】 ありがとうございました。

それでは、今ありましたけれども、取組、今、補足をしていただくという意味で、まずは取組6番のかつてにおもてなし大作戦について、山崎さんから補足していただいてよろしいですか。

【山崎委員】 はい、分かりました。

今、御説明いただいた6番ですね、パラムーブメントアクションって書いているところで、かつてにおもてなし大作戦というプロジェクトを担当させていただいています山崎と申します。Studio-Lという事務所をやっています、今日も大阪からやってまいりました。

このプロジェクトの特徴は、1回ここでも説明させていただいたんですけども、なかなか分かりにくいことなので、説明も加えながら再度お話ししたいと思います。今ざっと説明をお聞きしていて、いろいろな特徴を持っている方々がパラムーブメントに対してアクションを起こしていくということをされているんですけども、小学校だったりとか、アプリだったりとか、もちろん英国だったりとかといういろいろな専門的な側面からしていると。ここは、何かやりたいんだけれども、特段何か専門を持っているわけでもないし、どっかに所属しているわけでもない川崎市民の方々が、自分たちの力でどういうふうパラムーブメントに貢献できるのかということをやっていこうというパートだと思ってくだ

さい。

その中でじゃあどういうやり方にするのか。3年間、進めていこうということだったんですけれども、まずは、普段だと何かまちづくりってチームを作ったり、社会に対して正しいこと、いいことをやっていこう、社会の課題、地域課題を解決していこうというところからスタートしますし、我々も、普段そういう取組の仕方をしていたんですけれども、今回は、まずチームにならない、個人からできることを考えましょうということにしたのが特徴的な1点です。それからもう1点は、社会の課題を解決しようとしなくていいと。取りあえず好きなこと、楽しいことで誰かをおもてなししてみてくださいと。これが2点目の特徴です。だから地域課題を考えないし、チームを作らないということからスタートした結果、53種類、最初に10チームとか20チーム生まれたんじゃなくて53種類の個人の活動というのが生まれたというのが特徴的でした。これ、1年目ですね。53種類の楽しいと思う活動をいろいろと実験的に、いろいろな人をおもてなししてみよう。駅前でコーヒーを入れてどうぞと振る舞ってみましょうというようなところから、無料ですよって。ただ、自分がコーヒーを飲んでもらうのが好きだからやりましたというようなことをまず1年目に練習してみました。

2年目に、そこにパラの視点を入れてみたらどうなるでしょうということを皆さんにお伝えしたんです。好きなことにパラ、パラって何というところから勉強していただいて、障害のある方と一緒にこれをやったらどうなるか、外国人の方々と一緒にこれをやったらどうなるかということで、好きなことの中に少しパラの要素を入れていただくというようなことをやって、また、これも53種類、いろいろなところでやりましょうということになっていたんですが、この2年目の最後の辺りでコロナということになったので、先ほど説明していただいたとおりですけれども、53種類全部が出来切らなかったということで、ほぼ半分以上、6割ぐらいはパラの視点もちゃんと入れることができたんです。パラの視点って何か分からないということだったので、リサーチツアーといって10回ぐらい、おもてなししようと思う方々に、障害のある方々と一緒に活動してもらったりとか、外国人の方々のところへ行って勉強させてもらったりとかいうようなことを積み重ねて準備したんですが、実際には活動できたのは21というところにとどまりました。

今年は、これ、オンラインでもうやらざるを得ないということになってきましたので、おもてなしをしている風景を撮影して、おもてなしTVというテレビということで放映していくというようなことにしていこうかなと思っていました。大分だからいろいろな事業

が変わってきたんです。先日も、今回来られている須藤委員と一緒に超福祉展をやりましたけれども、やっぱり完全オンラインに須藤さんのところも変えられていて、僕もそこでお話をさせていただきましたが、ああいう仕組みというのが大分重要になってきたなと感じております。今回我々も、おもてなしなんだけれども、自分たちがおもてなししていることを録画して行って、それをずっとYouTubeで配信していくというようなことに変えていかなきゃいけないかなと思っているところです。来年の1月23日から24日のこの2日間のときに、これまでおもてなししてきたのを全部アップしていくというような、非同期型、同じ時間にやっているわけではないんだけど、それらをこの日に並べますよというようなやり方で、かつてにおもてなしテレビというものをしていく予定です。これに対して、今年の10月23日からキックオフということで、今ちょうど、このかつてにおもてなしテレビで何か出してってくれる人、演者の方々というのを募集しているところで、10月23日から来年に向けて、おもてなしテレビの準備を進めていくような会としております。

最後に1点だけ、これは2020年を目標にしていましたので、1年延びるということになると、我々の関わりも1年前に終わってしまうんですね。ここは結構どうしたものかなと思ってはいたんですけども、チームのメンバーが、2021年までの間は、もう自分たちで事務局のようなものをつくって、自分たちでうまく進めていかなきゃいけないよねというある種の危機意識を共有してくれたということもありまして、実は並行して市民の方々自身が運営組織を今つくるというような準備をしておりますので、3月末に我々の関わりは終わるかもしれないんだけど、引き続き市民主体で進めていってもらえるような組織体制であったりとか運営の方法というのを考えていきたいなと思っております。

以上です。

【福田市長】 ありがとうございます。

須藤さんと一緒にやられたという、補足ありますか、何か。

【須藤委員】 いえいえ、たまたま渋谷で今年8年目を迎える超福祉展という。

【福田市長】 超福祉展のほうですね。

【須藤委員】 はい。

【福田市長】 なるほど。

【須藤委員】 その話を。

【福田市長】 分かりました。

また御意見は後で頂くとして、じゃあ次に進めさせてよろしいですかね。後でまとめて、また御意見、御質問などを頂ければと思います。

続きまして、ブリティッシュ・カウンシルとの連携事業について、湯浅委員からお願いいたします。

【湯浅委員】 ありがとうございます。ブリティッシュ・カウンシルの湯浅と申します。よろしく申し上げます。

前回の会議のときにも御紹介をさせていただきましたけれども、過去3年間にわたって川崎市さんとのコラボレーションで、英国で、障害があってもなくてもあらゆる人が音楽を等しくできる機会を持てるように活動をしているドレイク・ミュージックという団体と川崎市とのコラボレーションの事業をさせていただいています。去年3回目だったんですけども、事業の柱として主に大きく3つあると思います。

1つは、障害がある人との音楽活動を推進していけるフリーランスや、またはオーケストラ、プロの音楽家を育成していく。日本では、多分、音楽家の方は学校に、音楽のワークショップに出かけたりはよくされていると思うんですけども、多様なニーズのある障害のある方との音楽の在り方というものを、英国のやり方といいますかアプローチを御紹介しながらファシリテーターの育成をしています。多分、特徴的なところは、ここにも書いていただいて、障害の社会モデルということを非常に中心に据えて全ての活動が行われていますので、障害を足りないところというふうに見なくて、何かがあるからこそできない、その障壁を取り除きながら誰もが活動できるということを目指しています。その中で、ドレイク・ミュージックの非常に特徴的なところがテクノロジーを使っているというところで、恐らく今、日本の中でも学校教育でiPadですとかいろいろなテクノロジーが使われていて、多分そこにも非常につながるところがあるかなと思いますが、音楽家の方には、オーケストラのバイオリニストの方にiPadを渡して、iPadを使いながら音楽的プロの技術を用いて障害のある子どもたちと曲を作っていく。子どもたちが主体的に参加できるような取組というものをできる人を育成しています。

2つ目が、障害のある音楽家を育成していく。まだまだ日本の中では障害のあるプロの音楽家の方たちというのが目に見える形で出てきていない、本当に一握りだと思うんですけども、川崎市においても、障害のある子どもたちの将来の道筋の中で音楽家というものを諦めないということが長い道のりの中には実現できるようになるといいなと思っています。

ます。

3つ目が、そういった様々なニーズがある音楽家の方々が活動するためには、やはりその方たち特有のニーズに合った楽器を開発することが必要になってきます。そこでテクノロジストの方やプログラマーの方、技術者の方と障害のある音楽家のコラボレーションで新たなアクセシブルな楽器を開発するということにつながるような道筋をここ3年一緒にさせていただいています。

その中で、ちょっと振り返ってみますと、かなり音楽家の方たちのネットワークが川崎の中にできているなと思います。中でも川崎版ドレイクをつくりたいねと音楽家の方から声が出ているというのは非常にいいかなと思いました。

あと昨年新しかったのは、育成といいますか、一緒に様々なことを試していた音楽家の方々と一緒に、川崎市の方にコーディネートをしていただいて、特別支援学校に行かせていただいて、そこで実際に学校の子どもたちとの曲を作っていくというワークショップをドレイクの音楽家と日本の音楽家が一緒にやりました。そこで川崎市の成沢さんにも見学をしていただいたので、その様子を見ていただきましたけれども、特に先生方が言ってくれたのは、今、特別支援学校の中で音楽の授業はあります。その中で、例えば音楽療法士さんとの協働というのもやっているけれども、まだまだどういうやり方があるのかということも模索中であると。あとは特別支援学校の中でiPadなどは使っているけれども、音楽では使っていなかった。そういった中で、iPadだけではない様々な音、押したら音が出るとか、そういったものを使うことによって、非常に移動の制限のある子どもたちもほかの子たちと一緒に、例えば曲を作ったり、曲を自分が奏でているんだということを体感できるようなことができました。それによって、多分、先生たちも、こんなやり方があるんだということによって非常にはっとしたということと、何よりも子どもたちが非常に生き生きとしている姿というのを先生方や、あと音楽家が目にしたということが非常に大きかったと思います。

英国においても、そういった障害のある子どもたちの音楽教育を、どうしても画一的になりがちなんだと思うんですね、学校教育の現場の方がいたら申し訳ないんですが、音楽の授業というのが。そういった中で、非常に自由に、テクノロジーの力も借りて自分たちの発想を出せるというところをいかに実現するかということで様々な取組が今なされていて、そういったカリキュラムの開発の可能性というの、もしかしたら川崎発で英国との連携の中でしていくということは可能性があるのかなと思いました。

今年度については、こちらに調整中と一言書いてありますが、本来であれば実際にドレイクに来ていただいて、夏にサマーミュージアムで、より多くの市民の方と一緒に授業をするはずだったんですけども、コロナで渡航規制もあってできない中で、現在、来年のオリンピック・パラリンピックに向けて、来年大きなセレブレーションといますかピークに持っていけるような形になるように、今年はオンラインで、今まで積み上げてきたネットワークやモメンタムを継続していくような形を考えています。オンラインだからこそできることがあるんだと思いますので、そういったことをいろいろ試してみたいということと、あとオンラインのアクセシビリティということが多分、重要なんだと思うんです。オンラインだからこそ誰も排除しないという在り方についても、ドレイクは様々な知見もありますので、そういったところで協働ができればなと思っております。ぜひそれをまたよい形で、来年度からその先につなげていければなと思います。

以上です。

【福田市長】 ありがとうございます。

いろいろお話ししたいことがたくさんありますが、ちょっと先に進んで後で一括でということ。

続いて、8番のインクルーシブなかわさきハロウィンの開催について、土岐さんからお願いできますか。

【土岐委員】 かわさきハロウィンの企画制作を担当していますチッタエンタテインメントの土岐と申します。

内容は、資料を配付しているんですけども、この資料、参考までに見ていただきたいという程度のもので、ちょっと資料から離れてお話ししたいんですが、私どもかわさきハロウィン、今年24回目で、開催するのか中止にするのかという判断を迫られたときに、オンラインは実は考えていなかったというか、オンラインでかわさきハロウィンの何かダイナミックな感じとか賑やかなスケール感とかというのはちょっと表現できないだろうと考えていました。なので、やるんだったらどっか場所を変える、密にならないような、例えば競馬場を借りるとか、臨海部に持っていかうとか、そんなようなことを考えていたんですけども、結局、物理的にそれは可能だとしても、それを参加者は楽しいんだろうか、見る人は楽しいんだろうかと考えると、やっぱりそれは全然楽しくないよね。結局エンターテインメントにならない。だったらやっぱり中止しようというときに、万策尽きたときに初めて、まあ無理だと思うけれども、ちょっとオンラインを検証してみようかと思っ

て真剣に考え始めたんです。オンラインでやった場合、どんなことができるんだろうというところ、いろいろ真剣に向き合ってみるとオンラインの可能性というのがいろいろ見えて、初めて見えてきたことが、追い詰められたからなんですけれども、これしかないと思ったときに、オンラインでやることの何か可能性がいっぱい見えてきました。

その中の1つが、最初からパラムーブメントとか、実はもちろん意識していなかったんですけれども、その中の多分1つの大きなメリットが、バリアフリーな環境をひょっとすると提案できるんじゃないかということだったんです。ハロウィンパレード、毎年、これもまた須藤さんのところにお手伝いいただいて、参加したい誰でもが参加できるパレードを実現させようということ、3年ぐらい前からですかね、車椅子の方でも安心して参加できるような環境、あるいは2年ぐらい前からダウン症の子どもたちが踊りながらパレードに参加してくれていてすごく楽しんでもらっていたり、あるいは高齢者の認知症のおばあちゃんが車椅子で仮装して参加してすごく喜んでくれたりというような取組を3年ぐらいやっていたんですけれども、どうしても誰もが参加できるという環境はやっぱり無理で、物理的には川崎駅まで自力で来てくれないとパレードは参加できないということで、すごいジレンマというかな、どうしたらいいんだろうとずっと考えていたんですが、今回追い詰められてオンラインでやりましょうということを考えたときに、何かいろいろなバリアがふうっと消えちゃったという。スマホで仮装動画を撮って、それをSNSに投稿するというだけなんです。それで全国、全世界から集まった仮装動画を我々がプラットフォームをつくって、そこでパレードであるかのごとくわーっといろいろな仮装者の人たちを世界の人に見ていただけるという環境づくりを我々はネット上でやったんですけれども、ということを実は今、まだ取り組んでいる最中なんで、うまく決まっていっているわけではないんですが、そういった意味で何かすごく可能性を今感じています。このことにどれだけ共感していただいているかどうか、まだ分かりません。そんなに参加者も集まっていないので。ただ、ひょっとすると来年辺り、オンラインとオフラインを両方使うことによって一気にいろいろな可能性が広がるということはあるんじゃないかなと。そういう意味での今年の体験というのは、我々にとってはすごい気づきだったなと思っています。

以上です。

【福田市長】 ありがとうございます。

お三方から今3つのプロジェクトで補足を頂きましたけれども、非常に前向きに捉えていただいたというか、ちょっと1年前とか2年前の、このシェアしていた感じと確実にレ

ベル感が上がっているというか。山崎さんのやっていた取組も、結局、運営母体が市民側に移っていくというすごい形になってきている。あるいはカリキュラムの可能性が出てきた。湯浅さんの話というのは、カリキュラムにもとかということです。土岐さんの今のハロウィン、オンラインだからこそできる価値というようなバリアがなくなったというのは、何かもうレベル感がすごい上がってきたという感想を持たせていただきました。

せっかくですから、今3つの、お三方に対してでも結構ですし、1から12までの取組を今、御説明を一括でさせていただきましたが、皆さんから御意見など、あるいは御質問等々ございましたらよろしくお願ひしたいと思ひます。どなたからでも結構でございます。

杉山さん。

【杉山委員】 こんにちは。杉山です。よろしくお願ひします。

1番目のパの発信も含めてとバリアフリーに関して、ちょっと2点お話しというか考へていることをお伝えできればと思ひております。

1つは、今回のコロナにおいて、受入れ環境の意識が、外国人に対しての受入れ環境も含めてなんですけれども、少し事業者さんが戻ってしまうというか、2013年ぐらいの意識に戻ってしまっている環境がこれから出てくるんじゃないかとすごく思ひておりました、それはもちろん日本人のお客様もそうなんですけれども、これから外国人の方に対して本当にちゃんと衛生管理の対応をしてくれているのかとか、日本のお客様に対してどういふ影響が出るのかとか、飲食店だけではなく、そういうちょっと意識の変化が出ているかなと思ひています。その中で、改めてきちんと川崎の事業者様、飲食店とかお土産屋さんとか施設の方々に対して受入れの意識をちゃんと伝えるセミナー的なものがオリ・パラに向けては非常に重要になってくるかなと思ひています。機運は高まってくると思うんですけども、事業者様が受け入れたくないという思ひになってしまつてはいけないと思ひますので、そこの準備は非常に重要かなと思ひているのが1点目です。

2つ目が、私どももぐるなびと、あとインバウンド向けのライブジャパンで衛生環境の対応をしている12項目を、例えばお店で手洗いをしていますとか、ちゃんと消毒をしていますという項目をオンライン上で発信をスタートさせたんですが、さらに動画の配信もスタートさせました。万国共通で動画は見られますので、1分ぐらいで、先ほど言ひましたバリアフリーの対応を動画でどんどん配信していくというのも今後のオリ・パラの時期に向けては非常に分かりやすいかなと。そこは先ほどあつたお話しと一緒に、既にある写真

とか、持っていらっしゃる動画とかを簡単に組み合わせて、事業者自らが発信できるという形になっているので、実は文字で起こすよりも動画のほうが早いのではないかなというところで数の拡大に広がるかなと思っております。

最後、先ほどのかってにおもてなし大作戦と、あとドレイク・ミュージックとかすばらしいなと思ってしまして、実は12月、私、湯浅さんのところに少し体験で行かせてもらったんですけども、これだけいろいろな体験ができるものが、オンライン・オフライン限らずにあるというのは川崎の本当に強みだなと思ってまして、私が参加したとき、ちょっと私も音楽をたしなんでいるんですが、私ができたのは音を拾うだけで、本当に障害を持っていらっしゃる方のほうがプログラミングとかのレベルが高過ぎて、私が感動するぐらいだったんですけども、新しいそういう音楽というものを一緒につくるという体験で、また逆に学ばせていただいたり感じたものも多かったので、リモートワークが増えていたり、あと旅行が海外に行けなかったり、出張が減ったりということで、市内にとどまっている期間が増えている市民の方が多いということのを逆にプラスに捉えると、様々やられているこの体験を多くの方に体験してもらえそうな発信というのがすごく重要かなと思いました。

【福田市長】 ありがとうございます。

中森さん、いかがですか。

【中森顧問】 この11番の小学生を対象としたというこのマップ作成で、小学生の感想というのはすごく気になります。要はやってみて、小学生がどのように感じたのか、その辺、ちょっと何か補足があったら聞きたいなど。

【福田市長】 事務局、お願いします。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 小学生の方には車椅子に実際に乗ってもらって等々力陸上競技場の中を周ってもらったんですけども、かなり新しい発見があったと思ってしまして、その辺は話がありました。やはり車椅子に乗っていると、先ほどもちょっと説明したんですけども、扉1つとっても、普段自分たちが何気なく使っている扉が、実は車椅子の方にとっては、あれ自体がバリアになるんだということ、当然小学生は知らなかったわけなんですけど、そこでやっぱり新しい気づきがあったとか、坂とか怖かったと。一応スロープは、後ろから降りなきゃいけないところを前から行ってみたりとかして、そういったこともやったりもしたんですけども、そういうことで自分たちがふだん知らなかったことを知ることができたというような子どもたちの感想はござい

ました。

【中森顧問】 やっぱいい反応というか、それぞれ感じていただいて、車椅子の人、障害のある人たちが、何ていうんだろう、生活しづらいとか、移動しづらいとか、こういうところはもう利用できないとか、そういった気づきがあって、それじゃあよくないんだということまで小学生に知ってもらえたらありがたいなということと、できたらこれ、全小学生でやったらどうかなというのが。要は生活の時間とか、何ていうんだろう、教科でない時間に、学校周辺のバリア、バリアと言ったらおかしいかな、使いづらいところをみんなて調査しましょうよと。車椅子に乗ってやってみたらどうなんですかという、子どもから変えていくことが今後大事ななと思っていたり、あと子どもがそういう意識を持てば、多分、親とか大人にも、何ていうんだろう、そういう気づき、リバーエデュケーションか、要は子どもから親にいろいろ知ってもらう、そういう取組まで行けるので、この11番は発展的に。いや、来年までじゃなくて来年以降にね。以降でもやっぱりそういうこと、いいことなのでぜひ進めてもらいたいなということと。

あとちょっと最近やっぱりどんどん意識が変わってきた中で、何かバリアフリーという言葉自体が、僕の中で言うと、バリアがあるのはおかしいんだからという意味で言うと、ダイバーシティとかインクルーシブとか、あとはユニバーサルデザイン、要は誰もが使いやすいというのが当たり前という前提で世の中動いていっているんで、ちょっとバリアフリーからいい言葉が川崎から出たらいいのかなとか、そんなふうに感じました。

【福田市長】 ありがとうございます。すてきなコメントを頂きました。

成田さんと、それから栗山さんは中学校の校長、あるいは特別支援教育にも造詣が深いということでコメント、それぞれに頂けたらと思うんですが、成田委員長、いかがですか。

【成田共同委員長】 ちょっと心のバリアフリーのエピソードの話なんですけれども、それは市が毎月1か月おきに発信するというのもすごくいいことだなと思って聞いていたんですが、先日私が体験したことなんですけれども、某県立高校の多分野球部の高校生だと思うんですが、私、車を運転していて、横断歩道があったんで、その子に譲ったんです。そしたら、その高校生が、お辞儀して横断歩道を渡って、渡り終えたら私のほうを向いて、さらにまた深々とお辞儀をしていったんです。何かそれだけでも私はすごく感動して、感動というのかな、すごく気持ちがよくなったんです。その数日後に、今度私がまた車を運転していたときに、川崎市の水道局の方が工事をしていて、ちょっと通行止めになったんです。そのときも、すみませんでしたって、申し訳ありませんって声をかけてくだ

さった後に、また工事をしていた方が、私のほうを見て深々と、申し訳ありませんでした。何か当たり前のことなのかもしれないんですけども、その言葉とかそういう行動で、私が受ける気持ちが、すごく気持ちがよくなるなという、何かそれが本当の、心のバリアフリーじゃないですけども、そういうふうに一人一人がそういう気持ちを持つと、もっと生活の中で気持ちが穏やかになったり、私もそういうことをしようとか、そういうふうな気持ちになれたのが最近の出来事だったので、ちょっと今の話からずれてしまうかもしれないんですが、こういうことが心のバリアフリーなのかなと感じました。

【福田市長】 ありがとうございます。

栗山さん、いかがですか。

【栗山委員】 コロナ禍にあって、ソーシャルディスタンスということで、なかなか人間関係を構築していくのに距離感というのがすごく大きくなってしまって、そこをどうやって子ども同士、教師と生徒もそうですけれども、詰めていくのかということを中心に考えて指導してまいりました。

その中で、私が常に子どもたちに発信していたのは、心の距離感をどんどん狭めていくことは可能だよねということで、最近、朝会でお話ししたのは、日本のお辞儀って見直してみるといいよねという話をしました。マスクをしているので、言葉がなかなかはっきりと明瞭に聞こえなかったり、気持ちがなかなか言葉に乗らなかったりするときに、ちょっと会釈をするだけで、相手に気持ちが伝わるということがある、そういったこともちょっと見直してみようよというようなこともお話をさせていただいたりしています。

バリアって、そういったところで、ちょっとしたしぐさとか言動の中で解消されていくこともあるし、そもそもバリアありきじゃなくて、そこをつくらせないような指導というか、そういったところもしていきたいなということで、子育てをしているお父さんやお母さん、保護者の方に対してもそういった取組を発信しながら、多様な考え方とか認めたり、距離を近づいて一緒に生活してく共生の心を育成していけたらと思っています。

【福田市長】 中森委員からお話があった、こういうバリアフリーマップを作成するためのプロセスだとか、あるいはやってみるキャラバンだとかというような取組ってやっていますけれども、中学校のところで生徒さんたちがそういった体験する機会というのはどれほどあるものなのでしょうか、実態として。

【栗山委員】 本校では、実は申し込んだりしたんですが、今回コロナということで、全てがいろいろなことが中断してしまっているんですけども、ぜひそういった機会を取

り入れることは可能だと思います。触れ合っていないと理解は進みませんので、常にそういったことを身近に感じられるようなルートをつくっていくということが大事だと思います。

※後日、令和3年3月に長沢中学校において「オリンピック・パラリンピアン交流事業」の実施が決定した。

【福田市長】 ありがとうございます。

遠藤さん、いかがでございますか。これらの取組では。それから外れても結構ですが。

【遠藤委員】 取組というか、ちょっと個人的な興味で質問してよろしいですか。

【福田市長】 はい。

【遠藤委員】 湯浅さんなんですけれども、たまたま最近、新しいプロジェクトとして、僕はクロス・ダイバーシティという一般社団法人で音楽に関わることも最近始めておりまして、有名どころで言うと落合陽一が日本フィルとやっていたりとか、あとOntennaという富士通の本多君が耳聾の方が振動で音を考えるということがあるんですが、最近僕が関わった方はフォーカルジストニア、分かりますか、障害かどうかはちょっと難しい線引きのところなんですけれども、これはプロのミュージシャンの方が多くて、急に弾けなくなるという症状があって、これ、治らないんですね。それで皆さん、挫折して、音楽を引退されるという方、有名なミュージシャンの方もそれでニュースになったりするんですが、ドレイクの中にそういうジストニアの方が、一旦弾けなくなったけれども、音楽を続けるための技術開発というようなことに対してちょっと事例を探していたんですが、その中でこういった方々、何か似たような事例があったら教えていただきたいなと思います。

【湯浅委員】 ぜひちょっと、また別途御紹介もさせていただきたいなと思うんですけれども、多分ドレイクのチーム自体はすごい小さいんです。本当に数名なんですけれども、彼らが英国中いろいろなところに、いわゆるハッカーというプログラマーのネットワークをすごく持っていて、ちょっとハッカソンをしたりとか、今、多分オンラインで物すごくそういったこともしているんですが、アプローチとして、その個人のニーズに合わせたものをビスポークで開発していくという形なんです。なので英国でも同じようにプロの方でとか、そういった症状が出てしまって諦めざるを得ない方が、それをいかに音楽活動を続けていくかということをサポートするためのというのは、かなりいろいろな事例がありますので、逆にあとは日本型の、またそのテクノロジーの使い方での解決の見だし方というのはきっとあると思うんですね。なので、ちょっとここは日英だけではなくて国際的にそ

ういった、ある課題がある方をどうやってみんなで、技術を持っている方がサポートしていくのかということが何か一緒にできるといいなというふうには思っていましたので、またちょっと情報交換をさせていただければと思います。

【福田市長】 どうぞ。タイムスケジュールだとあと7、8分はこのことで。御意見を頂ける方。

【遠藤委員】 もう1点いいですか。

【福田市長】 よろしくお願いします。

【遠藤委員】 トップアスリートの助成金とあって素晴らしいと思ったんですけども、これもう1点で、ちょっと特に耳に入れていただきたいと思うことがあって、こういったのもう既にトップアスリートの方で、もう障害というものを受け入れて自分のことを理解して前に踏み出した方々が多いと思うんですけど、こういった方々のようになる前段階として、自分が、例えばパラリンピックってやっぱりテレビでいっぱい放送されるので、皆さん多分、義足ですね、僕、義足を作っているの、板ばねを見たら、もうパラリンピックだって直結してしまう人がいるんですけども、あれって実は走るための義足なんです。走るというのはそもそもみんながやれるものなので、本当はアスリートのためじゃなくて、いわゆる走りたいと思う人はみんなが手に入ったらいいなと思っているんですけど、1つのボトルネックはコストだと思います。コストはもちろん、僕、技術者なので、安いものを作っている最中で、もうこれも来年ぐらいに販売したいなと思っているんですけども、もう1個が、例えば川崎市は政令指定都市で、障害者手帳の情報を持っていて、障害者総合支援法で義足を買うとしたら誰がどの義足を持っているかというデータを持っているんです。なので本当だったら、そのタイミングで走れるようなオプションがあったら、そこで情報提供したりとか、もし助成金も既にあるんだったら、走れることもセットでその人に、何でしょうね、特に僕は子どもが走ってもらいたいなと思っているんですけども、義足を買うタイミングで走ることも考えた義足の作りをするというようなことができたらいいなと思ってずっと活動しているんですが、これ、先月、静岡県でやろうと思ったんですけども、静岡県はちょっとグレーゾーンの中で、小学校に声がけをするみたいなことをやったんです。いろいろな市町村、行政と話すんですけども、この障害者のデータの2次利用がもう絶対駄目だということで、本人たちは、走りたいという子はいらぬにもかかわらず、そこの遮断は本当にもったいないと日々思っていて、これ、何とかならないかなといつも思っています。なので、ちょっと何か抜け道なり、何か変えるところ

ろがあるんだったら、ぜひお願いしたいなと思いますけれども。

【福田市長】 ありがとうございます。いや、実はこれから、今デジタル庁の話もありますけれども、個人情報をごとまで法律上解禁していくかと、利用の仕方をですね。というのが、私たちのプッシュ型に支援していく、あるいは情報を出していくための、これが物すごい大きなバリアになっているんです。そのことというのは当然課題として認識していて、もしここが外れれば、相当面白いことができると思っていて、ぜひそれはしっかり、個人情報を保護する大事さと、どう本当に個別最適な情報だとか支援だとかというのを実現させるかというのをうまく組み合わせたいと思っています。ありがとうございます。

【遠藤委員】 お願いします。

【中森顧問】 今に関連して、ちょっといいですか。

【福田市長】 はい。

【中森顧問】 スポーツ用の義足、ばね式の義足というのは非常に常々考えていまして、小学生というのはまだ体が小さいので、生活用の義足に何か少し、そのときだけ付け替えて板ばねにするとか、そういうふうな工夫はできないのかなというのは、ちょっと遠藤さんに、どうなんだろう。全く別にするのか、例えば膝から下の切断であれば、足の部分、フットの部分だけをばねに替えると。生活用の義足にそれをつけてジョギング程度はできるとか、本当に競技を目指すとちょっと難しいかも分かんないですけども、普通にジョギングする程度なら、多分、生活用の義足でもいけると思うんですね。その辺がどうかかと。技術的に。

【遠藤委員】 1つの事例として、静岡県の障害者スポーツ協会って山本篤とか佐藤圭太とか静岡県出身の方が多いいというのもあって、結構サポート体制が整っていて、なのでそこでちょっと声がけをさせてもらって静岡県主導やっているという内容なんですけれども、板ばねを交換するというのを、まずソケットってかぼっとはめるやつですね。断端に。ソケットの作りが走ることを想定したら簡単に交換できるんです。なのでソケットは日常用のものを使って、板ばねだけを交換する。板ばねは高いので、それは何とか安くしようというふうにやろうとしているのが僕たちがやろうとしていることです。ただ、リズフラン切断とか足関節離断という足がすごい長い状態で残っている人は、ここのスペースがないので、この下に板ばねをつけるということはできないんです。その場合はソケットの作り替えがあるというようなことを、そこはやっぱりお金をかけないといけないかなと思っています。

【中森顧問】 あと、これに関連していますけれども、前に、ちょっと不確定な情報なんですけど、障害者が障害認定を受けると、障害手帳の発行をします。そのときに、車椅子使用の障害であれば生活用の車椅子は貸与しますという、何年か置きに貸与できるような仕組みがあつて、和歌山県だと思ふんですけれども、そのときに、体育で必要だからスポーツ用の義足も一緒に貸与しましょうという話もあつたり、そこはちょっと、要は体育で使える、障害があつて、障害用の器具、用具、車椅子があれば体育ができるようになる。そういったところはちょっと研究していただければ。行政でないとなつと難しいんで。

【福田市長】 これは本当に、実はいろいろな、市長への手紙でもたくさんあつて、例えば補聴器1つとっても、補聴器の種類がすごく違ふと。この補聴器がスタンダードとされているかもしれないけれども、このぐらい高い補聴器をつけると物すごく楽なんだっていうふうに言われることもあるんですね。それって本当にいろいろな障害でどういうサポート器具だとかというふうなのを、これ、公費でやっていくかというのは実に難しい議論があつて、そこはいろいろな都市との比較もしながら研究をさせていただきたいと思ふんですけれども。全国の自治体、すごく迷っています。

【山崎委員】 すみません、いいですか。

【福田市長】 どうぞ。

【山崎委員】 僕の悩みなんです、皆さんに教えていただきたい。ちょっと話が変わっちゃうんですけれども。

先ほど3人も発表しましたけれども、大体おおむねオンラインでやっていこうということになるわけですね。ところがこれがまた新しいバリアを生んでいる可能性もあるというのは重々承知するわけですよ。どうやって乗り越えたらいいでしょう。オンラインになれない人たちに、コロナ禍で家まで行って教えにいけないけれども、みんなオンラインになっていくじゃないですか。これは何かいいアイデアとか何か事例を御存じの方がいたら教えていただきたいなと思ふます。オンラインになれない人たちにどうやってアプローチしたらいいでしょうか。

【福田市長】 多分みんなこれで迷っているという。

【山崎委員】 迷っているのかなあ。さっきドレイクは、誰も取り残さないオンラインの方法があるとかつてちらつと聞いたんですけれども。

【湯浅委員】 オンラインじゃないときのバリアとオンラインになってのバリアは絶対違います。今おっしゃったようにやっぱり。あとデジタル・ディバイドみたいな形の、今までと違う経済格差とか社会格差とか、また違うものが出てきて、ドレイクの実践の中では、障害でいくと目の見えない方、耳の聞こえない方とかいろいろな方がいるところで、あるコンテンツをオンラインで出したときに、それを全ての人がきちんと同じように受け取れるためには、情報保障の在り方ということにもなるかもしれませんが、その伝え方と実際、それももちろん含めてですね、在り方が、通常のフォーラムをするにしても、ただ、こちらに手話通訳者がいて字幕があればいいというのと全然違って来るわけです。なのでそのこのところの在り方、あとはオーディオ・ディスクリプションの仕方とか、字幕の入れ方とかというのを非常に研究して出しているようで、ただ、オンラインだからこそ移動が難しかった障害のある音楽の方が発表できるようになったとか、できることもあるし、多分本当に全体で考えないといけないんだろうなと思います。

ちょっと別件で、それこそ厚労省の方とも、このオンラインのアクセシビリティについて意見交換を非公式にさせていただいたときに、実際の当事者団体の方々もいろいろな実践ももちろんあるので、国のほうでもいろいろ検討されていると言っていましたけれども、恐らく多分、この川崎モデルをつくっていくときに、英国のやり方として、やはり当事者の意見を聞いていくと、当事者を巻き込みながら解決策を出していくということをすごくするんです。なのでもしオンラインのアクセシビリティについて新しいスタンダード、ガイドラインをつくらうといったときに、もしかしたら様々なニーズのある方と一緒に、ちょっともう研究する何かワーキングをつくるとかいうようなことをされてもいいのかなとは思いました。

ちょっと答えになっていないと思うんですけども、うちも今探しているので、一緒に探していけたらすごくいいなと思います。

【山崎委員】 悩みますよね。オンラインになれないわけだからZoomで教えるとかできないわけですよね。どうしたらいいんだろうと思って。

【瀬戸山委員】 今の話とずれちゃうんですけども、今ガイドラインということで話が出たので、実は私がやっている、川崎ビーチスポーツクラブというところでビーチバレーの指導をしているんですけども、最近入った女の子が聴覚障害を持っている。あと僕と今仕事を一緒にしているラグビーの元レジェンドで吉田義人って、彼もスクールをちょっとたまプラのほうでやっているんですけども、そこにも障害者の子が健常者と混じっ

てスクールに入っている。でも僕らは、教えるときに、健常者に対して教えることは慣れているからいいんですけれども、どう扱っていいか分からないんで、勝手に自分たちの中で、経験で、こんな感じがいいのかなと教えているんですが、何かそういったガイドラインみたいなものがあるのかな、ないのかなみたいなのが。僕らはちょっと知識がなくて知らないんで、もしあるのであれば教えてもらいたいなというふうなことを現場でそのときに思っているということです。どういうふうに接していいか分からない。どこまで、何か突っ込んでいいんだろとか、例えば障害、何ですかね、ただ、聴覚障害なので、普通にしゃべっていても本当にこの子は聞こえているのかな、分かっているのかなとかということも心配になるしという。障害の度合いにもよるんだと思うんですけれども。

【福山市長】 どうぞ。

【湯浅委員】 すみません、私は音楽家の方と同じように今まで障害のない方とのプログラムをやっていたたちとの事業を3年ぐらいやっていただいている中で、どうやったらいいですよというガイドブックがあるようなないようなというか、やっぱりニーズも多様なので、そのときに根底の考え方で全員が押さえていくといいよねというのが社会モデルというアプローチだと思うんです。そこに対するものが医療モデルという考え方なんですけれども、同じ状況にあっても医療モデルの考え方で対応することと、社会モデルで対応することでは全く違うんですね。受け取る方の感じも違うでしょうし、効果も絶対違うので、既に川崎さんの中でトレーニングをすごくされているとは思いますが、そもそもそのアプローチの仕方というか、何かそういったところから関係者が全員同じ考え方を持ってやっていくというのが1つあるのかなとは思いました。

【瀬戸山委員】 そういうのを勉強したり資料とかというのは、どっかこういうところで簡単に手に入りますよとか、研修とかあったりするんですか。

【福山市長】 現時点でそうまとまったものって存在しないと思います。例えば特別支援学校だとか、支援教育の中で、こういう障害特性のときにはどういうふうなアプローチでどういうふうな話だとか説明の順序だとかというふうなのは、非常にノウハウとしてはすごく蓄積されているはずですよ。そういうのをもう少しオープン化したほうがいいということなのか、どうすればいいのかって、何か栗山さん、御意見ありますか。

【栗山委員】 先ほど医療モデルと社会モデルというお話がありましたけれども、障害を個人のものにしないで、ありようが変わると障害が障害でなくなるという考え方なんです。だから環境設定をどうしていくのか、こちらの関わりをどうしていくのかということで、

その人自体は変わらないんだけど、周りが変わったり、さっきのスロープにしても何にしても形を変えることで、その方が障害をあまり感じずに生活できるようになるということだと思んですが、そのノウハウ、関わり方については、先ほど市長からもありましたように、特別支援学校や特別支援教育という中でのガイドラインみたいな、アプローチの方法みたいなものがありますけれども、私個人としては、その方を見て、その方に困り感だとかを聞いて調整しながらやっていくのが一番いいと思います。

【瀬戸山委員】 その困ったりするのが、どのくらい困っているのかを普通にずけずけ聞いちゃっていいのかどうかというところが我々としては不安になっちゃうんです。

【栗山委員】 ラポール、信頼関係の問題もあると思いますけれども、私たちはお子様をお預かりするときには、必ず保護者の方とかとお話をしながら困り感というところは共有して、ニーズを確かめながらやらせていただくというのは基本になっています。

【瀬戸山委員】 実際は突然、実は講師が毎週、毎回違うんです。民間なので変わるんです。担任とかいるわけじゃないので。そのたびに受付のときに、今日は障害のある子がいますと言われるだけで渡されちゃうので、お母さんと話す暇もないので、じゃあどう接していいんだろうなみたいな不安は大分あって、そういったものを、僕だけじゃなくてほかのスポーツの指導者も結構抱えているかなと思ったり、最近、民間のスポーツ施設とかスポーツスクールとかに親御さんが預けたがると思いますか、よく分からないですけれども、よく最近は、そういう広がりがある、いいことだとは思いますが、ただ、僕らのほうがノウハウが全くないというところで。

【福田市長】 菊地さん、どうですか。その辺りなんかお詳しそうですね。

【菊地委員】 いや、詳しくないんですけれども、我々もクラブの中で障害を持った子を中心とした教室ですとか、それから今、県立ですが、麻生養護学校にクラブをつくって日々活動したりとかしています。その問題というのは非常に、当然常に悩んでいて、みんなパターンが違うということもあって、これというものが無いんですけれども、ちょっと一般的な話で申し訳ないんですが、横島委員のところの障害者スポーツ指導者研修というのは物すごく今、我々も協力させていただいて、年間何回やっていますかね、今ちょっとできませんけれどもやっていて、その資格を持った方も非常に増えてきています。非常にベーシックなことではありますけれども、すごくためになることもたくさんあるので、ぜひこの研修は受けていただいて、資格を取っていただいて、あとは現場でやはり体験をしながら、いろいろなパターンに対応をしながら、またその委員さんたちのネットワークも

できますので、いろいろコミュニケーションを取って指導していくというところは我々させていただいているところですが、専門的な競技性というのはなかなか難しいですけれども。

【瀬戸山委員】 そうですね。向き合い方というところが。

【菊地委員】 そこはすごく勉強になるカリキュラムがいっぱいあると思いますので。

【福田市長】 須藤さん、どうぞ。

【須藤委員】 今すばらしい大事な議論をされていると思います。この議論は全て12番目の心のバリアフリーというところに帰依していくのかなと思います。瀬戸山さんのお話ってまさに、それこそが心のバリアだと思うんです。今、横で拝聴していて。要するにどう言っているかわからない。つまりそこには心のバリアがあるわけじゃないですか。

【瀬戸山委員】 そうです。

【須藤委員】 ちなみに最終的には栗山先生がおっしゃったとおり、本人に聞いてみればいいじゃないという非常にシンプルな話だと思います。私、NPOないしは自分の会社の仕事を通じてオランダ、ニュージーランド、フィンランド、カナダの小中高大学との接触機会が非常に多いんですけれども、向こうはそもそも小学生に上がったときから、特別支援クラスみたいに分かれていないので、教室ないしは暮らしの空間の中で混ざっているわけです。したがって目が見えなかがろうが、足がなかがろうが、あるいは見えない障害を持っているようが、何を困っているのかというのを子ども同士がてらいなく遠慮なく聞くという行為が常態化しています。これは大人もそうです。なので具体的な瀬戸山さんの先ほどのお悩みへの、これは非常に偏った視点かもしれないですけれども、私の提案は、1週間でも、できれば半年、1年でも、海外の当たり前の公立学校で、1回ちょっと見学に行くとか、御縁のある海外のスポーツ団体とつながりながら現地がどうなっているのかというのを見ると、実に軽やかに。耳が聞こえないのと、どういうふうに聞こえないのと、どうすれば分かるのかということをしてらいなく当たり前聞くということが全ての解決につながっていくというか。

【瀬戸山委員】 教えてもらえた僕は、そこで、ああ、そうなんだなと分かるんですけれども、じゃあ今日この場にはいないスポーツ指導員をしている人たちがいっぱいいて、そういう人たちがそういう話を聞く機会がなかなかないので、何かそういう、1枚のガイドラインであったり、先ほど言われたような研修を受けることはうちのコーチ全員、じゃあ1回研修を受けにいこうよということが、何かそういうきっかけがあれば分かりやすいなと

というのがすごく感じます。

【須藤委員】 瀬戸山さんの今の御意見って、多分大多数の方がお持ちの共通の思いだと思います。一方で研修やガイドラインというのは、もう過去30年、様々な企業や行政や政治も含めてつくってきたじゃないですか。それでもなおかつ、ここに心のバリアがあるということは、今までの研修以外の方法で、やっぱり氷解させていく。例えば今回、英国のチームの皆さんとのこういう交流機会があるとするならば、例えばイギリスとの、例えば学校の、通っていらっしゃる方の交流も、今後これを機会に検討していくとか、そういう方向もいいんじゃないですか。

【瀬戸山委員】 そうです。今回、コロナでガイドラインが、いろんな団体が出て、大会のときはこういうガイドライン、会議をやるときはこういうガイドラインって、そのとおりやればいいんだなって結構分かりやすかったりしたので、何となくガイドラインというのがもっと簡単に次回出たら、僕なんか今回、コロナの件でそう思ったので、割と障害者に対してとか、そういうハンディキャップある人に対しては、ちょっとした簡単なガイドラインでいいので、あると、うちのコーチ陣全員に配って、こういうことだからなみたいと言っておけばいいのかなという気がちょっとしたので、ちょっと浅くかもしれないんですが。

【福田市長】 ありがとうございます。横島委員どうぞ。

【横島委員】 先ほどの聴覚の方の話ですと、川崎市内に聴覚の情報センターがありますので、まずそういったところで専門の方がいらっしゃるかどうかという情報とか、あと川崎、カルッツでデフバレー、やっていますね。ですからそういうところで、何ていうんですか、情報収集ですか、そういったことができれば、そのつながりというのができていくのではないかなと思います。以上です。

【福田市長】 ありがとうございます。

いや、改めてこのメンバーのすばらしさというのを、みんないろいろなことでもやっていますけれども、答えはこの中にあるような感じがいたします。

【中森顧問】 ちょっとだけいいですか。

【福田市長】 はい、どうぞ。

【中森顧問】 今、聴覚のスポーツの指導の件ですけれども、これは僕の経験談です。聴覚の人に水泳指導を多分5年ぐらいは継続してやってきたと。その中で、体験で伝えたいのは、やっぱり基本的にジェスチャーを大きくするとか、あと口話、口を大きく開けて

ゆっくりしゃべる。その繰り返しをやっていく中で、多分、相手も慣れてくるし、理解している、していないというのも分かってくる。信頼関係ができてくると、より深いところまでできると思います。だから対面でやる場合は、やっぱり正面、要は正対をしてゆっくりとしゃべってあげる。周りの子がいる中で正対してゆっくりしゃべって確認していく。慣れてくると、多分いろいろ言ってくると思いますし、一生懸命指導すれば、それは相手にも伝わってくるから、そこでいい指導になるのかなと。あと、たくさんの中で違う先生が来てやる場合は、子どもにもよりますけれども、やっぱり手話通訳を入れないとできないのかなと。1対1とか少人数の指導のときは先ほどのケースでいいかなと思うんですけども。だからあんまり気にせずゆっくりしゃべりながら、分かったか分かっていないかということを確認しながらやればいいと思います。僕は、例えば身振り手振りを大きくしてあげるとということと、手話の「あいうえお」は覚えましたね。筆談ができないときは「あいうえお」で、「あいうえお」ってあるんですけども、これで言葉を伝える。その辺まで、だんだん長くなればなるほど指導者のほうも、やっぱり「あいうえお」を覚えたほうが僕はいいかなと思ったりしました。

【福田市長】 ありがとうございます。

大分時間も押してまいりましたので、次の資料の2のほうに移らせていただきたいと思っています。それでは、説明を、資料2と3を併せて事務局から説明をお願いします。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 オリ・パラ室の井上でございます。それでは、私のほうから御説明させていただきます。

資料の2、ページ番号4番を御覧いただきたいと思います。まず英国ホストタウンとしての主な取組の①広報・プロモーションの取組でございますけれども、左上、機運醸成に向けた巡回写真展の開催ということで、昨年11月に高津市民館で開催しました「GO GB英国フェスティバル」で作成しました英国代表選手あるいは英国ゆかりの文化・風景といった写真パネルを活用しまして、今年1月から3月にかけて、各区を巡回する写真展を実施いたしました。

その下、英国事前キャンプPR大使「きかんしゃトーマスとなかまたち」等を活用した広報ということで、まず川崎フロンターレとの連携としまして、選手がトレーニングマッチで着用するユニフォーム、これを英国からインスピレーションを受けたチェック柄で作成しまして、右袖にはきかんしゃトーマスの英国チーム川崎キャンプのデザインを入れていただきました。次に、駅・公共交通機関等における広報としまして、今年3月ですが、

市内の主要駅構内をはじめJR南武線の車内や、市内を運行するバスの社内外を活用した広報を実施いたしました。またJR南武線における広報としまして、同じく3月から、トーマスのヘッドマーク、それから側面ラッピングを行っております。

資料、右のほうに移りまして、英国代表チーム川崎キャンプ推進協議会でございますけれども、昨年10月に設立をしまして、現在40の企業・団体様に加入を頂いております。会員様から事前キャンプ時の英国代表チームへのおもてなしのアイデア等を募集して、実施に向けて調整をしているというところでございます。

その下、今後の取組でございますけれども、新たな広報グッズの作製といたしまして、大会延期後の事前キャンプの日程が確定をいたしましたので、今後新たに「GO GB」あるいはトーマスを活用したグッズを作製して活用していきたいと考えています。次に、シティドレッシング等による広報の強化ということで、さらなる認知度向上・機運醸成に向けまして、ポスターやフラッグ等を活用し、街を装飾することや、様々なイベント等におきましてブース出展をするなど、多くの市民の皆様が目に見える機会を捉えまして、低コストで高い効果が見込まれる広報を実施していきたいと考えております。市民との連携による取組の実施ということで、市民の皆様と一体となった英国代表チーム応援の実現に向けまして、市民参加による取組を進めていきたいと考えています。

【磯崎オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 続きまして、資料の5ページをお開きください。私、オリンピック・パラリンピック推進室の磯崎と申します。よろしくお願いたします。

資料3、事前キャンプ受入れ準備について御説明いたします。初めに左上、英国代表チーム川崎キャンプサポーターでございますが、令和元年7月1日より事前キャンプで活動するボランティアを募集させていただきましたところ、1,601名の応募があり、サポーター227名を登録いたしました。次に、研修会の開催でございますが、令和2年2月に等々力陸上競技場において第1回サポーター研修会を開催いたしました。

次に、中段に記載しております「GOGB!川崎応援パートナー」でございますが、サポーター登録に至らなかったものの英国応援に向けた取組への参加を希望した250名を「GOGB!川崎応援パートナー」として登録し、2月に交流会を開催させていただきました。

下段に参りまして、令和元年12月にBPAによる講演会、「英国パラリンピック代表チーム 東京大会に向けて」を開催させていただき、英国パラリンピック委員会スポーツ局

長兼英国選手団長のペニー・ブリスコー氏などが講師を務め、市内外から80名の方に御参加いただきました。

続きまして、右上、東京2020大会の開催延期に伴うBOA・BPAとの契約改訂についてでございますが、東京2020大会が1年延期されたことに伴い、川崎市がBOA及びBPAとの間で契約いたしました等々力陸上競技場の施設賃貸契約を改訂いたしました。事前キャンプの期間につきましては、BOAについては令和3年7月8日から8月5日、BPAにつきましては令和3年8月15日から9月2日となりましたが、受入れ競技については、BOA・BPAともに変更はございません。

次に、中段でございます英国代表チーム川崎キャンプサポーターの継続意向調査でございますが、事前キャンプの受入れが改めて改訂し、確定したことなどを踏まえまして、活動の継続意向確認を9月7日より実施させていただいたところ、226名中、これは今年度の9月時点の登録者数なんですけれども、そのうち15名の辞退の申出がございました。

最後になりますが、今後のスケジュールでございますが、10月より英国代表チーム川崎キャンプサポーターの活動を再開させていただき、12月頃にBOA・BPAの活動グループ分け、3月にはリーダーの選定を行い、来年5月に研修会を開催し、7月より事前キャンプへ従事といった形で予定させていただいております。

説明は以上でございます。

【福田市長】 ありがとうございます。

それでは、資料2と3のところについて、御意見、御質問などありますでしょうか。

大変ありがたいことに呼びかけをしたら1,600人というのが、かなり英語のレベルの高い人たちがこんなに集まってくるということにすごいなと思いましたし、それで何度も面談などを重ねて、ここまで絞り込むというのは結構大変な作業だった。そこに残念ながら受からなかったけれども、そこを取りこぼすのはもったいないということで、プラスパートナーとして登録していただいたりとかということで、引き続きずっと協力していただこうという受皿をつくらせていただいております。

このプロモーションもどこまでやればいいのかというのが、最初ちょっと判断がなかなか難しいところもあってですね。

特に御意見、よろしゅうございますか。

【草壁委員】 すみません。

【福田市長】 どうぞ、会頭。

【草壁委員】 去年の話をしてきたときというのは、この感染症がどうのというのはあんまり物を考えていなくて、どちらかというとフレンドリー寄り、できるだけというような、そういう形で受入れをして、できるだけ暖かく、市民全体としてというあれであったことはそうだと思うんですけども、どうも受入れをする側として、さっきの心のバリアフリーじゃないですが、実際にマスクをしてやればいいのか、何をどういうような形でやっていけばいいのか、そこら辺の物の考え方というのはどういうふうにしたらいいのか、ちょっとそこら辺を。

【福田市長】 これは全体の、国から示されるものも、ここも出てくるわけですね。

【磯崎オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 はい。先月の9月に国のほうから、Zoomの会議によるものなんですけれども、キャンプの選手やスタッフの入国から本大会、それから帰国までのプロセスを一覧整理いたしまして、我々川崎市は英国とのホストタウン契約を結ばせていただいていますので、例えば交流ですか、みたいなことも考えているんですけども、そういったことの実態、事実みたいなことを今後国から調査を受けまして、その事実、いわゆる全国市町村の実態を国のほうでヒアリングし、調査した結果、基本的には国のほうで骨子みたいな考え方をつくられた上で、その手引を、マニュアルを作らなければならないのですが、その手引を基に市町村のほうでマニュアルを作るといった現在運びとなっているんですけども、現状はまだ手引について検討しているという段階なので、大変申し訳ないんですけども、詳細についてはちょっとまだ分かりかねる状態でございます。

【草壁委員】 分かりました。

【福田市長】 まだ大分遠そうな雰囲気ですね、それ。

【中森顧問】 いや、今年12月までに会議を5回して、そこで一応発信するようなことは言っています。ただ、来年以降、来年以降というか大会まで、どのように進展するかは見えないので、現状として12月で一応締めて出すということは言っています。これは内閣府が主導して、あとスポーツ庁も厚生労働省も、JOC、我々も、東京組織委員会も全部まとまって、そういう人たちが構成する会。だからしっかりとした会議でしっかりとしたものが出ると言っています。

【福田市長】 ありがとうございます。中森さんに聞くのが一番早かったですね。

【磯崎オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 すみません。

【福田市長】 ありがとうございます。

ほか、よろしいでしょうか。

それでは、続いて、資料の4の説明をお願いいたします。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 では、資料の4、6ページを御覧ください。かわさきパラムーブメント推進協議会の設立についてということでございます。かわさきパラムーブメント、今、行政計画として推進ビジョンがございますけれども、来年、2021年度までが、その第2期の期間となっております。このかわさきパラムーブメントの取組自体はオリンピック・パラリンピックが終わっても、というよりはむしろオリンピック・パラリンピックを契機として、さらに川崎が本当の共生社会の実現に向けて取り組んでいくものでございますので、特に終わった後を見据えて、どうやって行政だけでなく市民あるいは事業者の方々と一緒に取り組んでいくのかというところで、今回この推進協議会というものを設立したいと考えております。

資料のほうになりますけれども、もともとビジョンの中にはこの大きく青く3つ分かれておりますが、推進ビジョンに基づく取組主体別の現状というところで、多様な主体の協働・連携で取り組むもの、例えば私どもオリ・パラ室を中心とした先導的共生社会ホストタウンとして取り組んでいくもの、あるいは市民が主体で取り組むもの、あるいは本市が主体的に取り組むものと、この大きく分けて3つに分かれております。

特に大切な点が左の2つなんですけれども、多様な主体の協働・連携で取り組むもの、例えば私ども先導的共生社会ホストタウンでございますので、これまで市内はもとより全国的にも例のない先導的・先進的な取組をこれまでも実施してまいりましたけれども、今後やっぱり行政だけではなくて企業とか当事者団体、そんな多様な主体と連携して取り組んでいく必要があるだろうということが1つございます。

右に参りまして、市民が主体に取り組むものというところになっておりますが、やはり今年はコロナの影響でなかなか難しかったところはあるんですけれども、昨年までは、やはりどんどんオリンピック・パラリンピックがあるから自分たちでもこうしたいんだと、かつてにおもてなしもそうですが、それ以外のところでも事業者さん、あるいは民間の方から、こんなことをやりたいんだという御提案を待って、私どもとしてはそういったことはとてもいい取組なので、お金とか出さないんですけれども、いろいろな人を紹介したりとか、場を設定したりとかというような調整を行ってまいりました。

こういった市がいろいろな主体と協働・連携して取り組む、あるいは市民、民間の方が

主体的に取り組む、そういったことを官民連携・民民連携の取組で社会変革を促進していくための推進体制、そのためにかわさきパラムーブメント推進協議会というものを設立していく必要があるだろうと考えております。

一番右側は市役所の取組です。ここでは説明は割愛させていただきます。

そのためのかわさきパラムーブメント推進協議会なんですけれども、基本的には左下の絵にありますように、産業界、地域団体、当事者団体、教育関係者が事例発表とか共有の場ですとか、あるいは主体的な取組をその場で推進していく、あるいは相互の連携推進、そういったことをこの推進協議会の中でやってまいりたいと思います。

このフォーラムとの関係なんですけれども、フォーラムの委員の皆様には、今日のような御議論を通じて具体的な取組提案をこれまでもしていただきましたが、今後、取組提案をしていただいて、その中で推進協議会に投げかけて、こんなことがあるけれどもやってみませんかというような投げかけ、そのような連携をしていきたいと考えております。

1枚おめくりいただきまして、7ページになりますけれども、では、どんな活動をイメージしているのかというところなんです、協議会自体は、できれば今年中、遅くても今年度中には設立したいと考えておりますけれども、基本的には協議会の構成・役割等でございますが、参加対象及び参加条件というのは市内に事業所・事務所を置く団体・教育機関等とかですね、参加に当たって費用負担は特に考えておりません。協議会の所管事項としましては、共生社会の実現に向けた各団体の事例発表・共有ですとか、主体的な取組の推進及び相互の連携推進。(3)の協議会の運営主体としましては、私どもが事務局を担って、会員相互がフラットな関係で事例発表などを行っていくというところと、(4)の活動資金なんですけれども、この協議会を通じて各主体が連携した取組については、活動資金といったものを提供したいと考えておりますが、この財源については、企業・個人からの寄附を想定しております。

構成団体と期待する取組のイメージということで、まだこれは各団体にお話しにいったわけではございませんけれども、このようないろいろな団体の方々に参加していただきたいと考えております。

展開イメージなんです、特にこの活動資金の展開イメージなんですけれども、構成団体がA、B、C、D、Eと、あと市がいたとして、何かプロジェクトをやりたいというDの団体がいれば、そこにDの団体となってE団体が一緒になったり、構成団体外というのがありますけれども、Iという方も一緒に加わったりして、そういった何かプロジェクト

トを実践するときには事業費を出していくと。その事業費に対しては寄附金という形でいろいろな人たちがお金を出していくと。これはイメージ図なんですけれども、こういったことを今後しっかり検討して、協議会のほうを設立してまいりたいと考えております。

説明は以上でございます。

【福田市長】 いかがでございましょうか。今後の推進体制ということでもありますけれども。成田委員長、いかがですか。

【成田共同委員長】 図を見ていて、今よりももっとパワーアップしそうな気が今すごくしてました。いろいろなところから協力していただければいいなと思いました。

【福田市長】 ありがとうございます。

かなり幅広なわけでありますけれども、これを本当に、大きいがためにどう動かしていくのかというのはすごく、それはそれなりに大変だというふうに、課題はあるかと思いますが、だけど関わりのないところは全く誰もいないという世界観でやっていかないといけないんじゃないかなというのも思います。中森顧問どうぞ。

【中森顧問】 何か1人でしゃべっているみたいで申し訳ないです。

【福田市長】 いえいえ。

【中森顧問】 やっぱり川崎市が共生社会を目指すんだという大きなアピール、まずこれできると思います。共生社会実現のための諸々の課題を皆さんで解決しましょうという大きな声かけがこれで幅広にできるかなと思って、非常にいいなと思いました。ただちよっと抜けているのは、地方公共団体、区はどうなるんですか。川崎の場合は区長会みたいなものがあるんですけど。

【福田市長】 いえ。

【中森顧問】 区はない。

【福田市長】 はい。

【中森顧問】 区の行政担当者にも同じようにやっていかないと、こういう民間の人たちが動いているのに行政があまり分かっていないというのはちょっとまずいかなということと、あとは自治会の活動に障害のある人たちの芸術とかスポーツとか、そういったもの、身近なところで含んでいかないと、やっぱり広くいかないのかなということと、この中で抜けているのはスポーツとか芸術、音楽とか絵画とか、そういう芸術の部分とか、そういう種類がちよっとここ、抜けているのかなと思いました。以上です。

【福田市長】 団体とすれば、スポーツ協会ですとか総合文化団体連絡会というのが文化の団体ですね。

【中森顧問】 なるほど。

【福田市長】 いかがでしょうか。小倉さん、推進体制などについて。

【小倉委員】 この推進協議会自体の構成の仕方というのは、私はすごくよかったなと思います。それぞれやっぱり餅は餅屋というところがありますので、そういうところでイメージで出たものを具現化するというか、そういうのはやっぱりよく分かった方たちからの意見を吸い上げていくというシステムが一番大事だと思うんです。今までこのフォーラムというのは、ある意味イメージ的なものとか、かなり大局的なところの話が多かったんですが、実際にこれから市がやっていこうというときに、それをどう具体的に細かく落とししていくかということが大事なことだと思うんです。分かっている人だけが分かっているのではなくて、市民全体の底上げということを考えれば、やっぱり多くの方たち、こういう専門のところ具体的に動いてくれる方を巻き込んでいく、そしてそれを地域に広めていく広報なんかは行政がするというのをやっていくことによって、より具現化していくんじゃないかと思って、私はすごくいいと思っています。

【福田市長】 ありがとうございます。横島委員、いかがですか。

【横島委員】 特に。

【福田市長】 よろしいですか。

【横島委員】 はい。

【福田市長】 丹野委員はよろしいですか。

【丹野委員】 本当に満遍なくいい形に入っているかなと。

ちょっとこの中で質問なんですけれども、このイメージ図の中で太字になっているところって何かあるんでしょうか。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 失礼いたしました。こちら、説明を落としておまして、実はこちらの協議会をこれから立ち上げるに当たって、準備会という中で幹事に最初をお願いしようかなと思っている団体、実際の設立準備会は一旦3月に行っているんですけれども、その中で一応設立の段階で少し御協力いただく団体でございます。

【丹野委員】 分かりました。ありがとうございます。

【福田市長】 多田委員、いかがでしょうか。

【多田委員】 推進協議会が今度できて、これは多分、私の前の委員なんかが発言していたプラットフォーム化ということにもう1個つながるのかなと思います。現実には私どもの財団で、パラアーツの関係ですけれども、専用サイトをつくりまして、やはりいろいろ活動されている方の相互の交流ですとか情報交換というのが、なかなかミーティングだけでは済まないところがあったんですが、パラアーツのプラットフォームをつくろうということで、大分御意見も頂いたり、まだ緒に就いたばかりなんですけれども、そんなことも進めていますので、それも含めて参加できたらいいのかなという感じがします。

【福田市長】 ありがとうございます。

本当に各団体のやっぱり強みがあると同時に、団体の提案であっても、これはどうやって解決するのというのが、答えが、ほかの団体、そこはうちがやれるよみたいな話というのは結構あるところで、こういうところにつながっていけばいいのかなとは思っておりますけれども。

山崎さん、お得意なところで、こういう、ちょっと堅苦しいイメージではあるかもしれませんが、いかがですか。

【山崎委員】 まさに今、市長がおっしゃったとおりで、どういうふうに運営していくかというのがすごく重要な気がします。会議の場をね。堅苦しい場になれば、各団体が団体の主張をしたりとか、ああ、そうですか、うまいことやられていますねみたいな会議になりますね。そうじゃなくて、もっと何かお互いに一緒にやりたくなっちゃうとか、だったらうちはこれができるよとアイデアがどんどん積み重ねられていくような会議ね。今しゃべっていて、この会議自体をディスっているように聞こえるかもしれないですけれども。いやいや、そうではない、これはこれでいいのかもしれないけれども、何か机も椅子も取っ払って、みんな動きながら会議をしているという協議会になったらどうなるのかとか、駅前で行って見たらどうなるのかとか、多分その会議の運営方法がクリエイティブであることというのが、何ていうのかな、統合化された社会というんですかね、インテグレート社会のようなものをつくっていく基盤になる気がするんです。先ほど障害のあるなし関係なく普通に声をかけるし、心のバリアフリーもどんどん乗り越えていくよというような議論もありましたけれども、そんな状態をつくろうと思うと各団体ごとの特性を、色を濃く出し過ぎるようにしちゃうと、そちらはそうですよねということを確認する場になっちゃうんです。せっかく集まったのに。だからそこが溶け合うようなマネジメント、会の進行方法というのがすごく重要。これだけ集められたからこそ、そこが大事になるかなと感

じていました。

【福田市長】 本当ですね。ありがとうございます。非常に頂きたかったコメントではありますけれども、ありがとうございます。須藤さん、何か。

【須藤委員】 今の山崎さんに同感なんですけれども、ちょっと1個違う話をしていいですか。

【福田市長】 どうぞ。

【須藤委員】 どちらにしても本日現在までは、2年間にわたって、このパラムーブメントというこの委員会の立てつけですよね。今お話したださったのは、これからこれをどう生かしていくか、継続していくかという前提だと思うんですけれども、やっぱり次の世代の若い人たちの、今の山崎さんのお話に準じますが、このおじさんやおばさんには理解できないというようなアイデアが、どこまで可視化されて、なるほどねと、それを涵養できるかと、ここにいるおじさんとおばさんが。何かそこが、未来へのキーワードかなと。例えば具体で言うと、来年に1年延びたのはラッキーと言えラッキーである一方で、その3年後はパリじゃないですか。パリと言え、例えば新種目でブレイクダンスというのが採用されますよね。ブレイクダンスの世界チャンピオンと言え川崎市在住の石川勝君だったりするわけです。例えば音楽、今ちょっと離席されましたけれども、遠藤さんの、例えば義足的な機能というものを、ある種アカデミックな既存のブリティッシュ・カウンシルさんの比較的クラシック寄りと、でもないけど、ちょっとアカデミアな遠藤謙君の落合陽一さんの研究というのを、例えばブレイクダンスというのをぼんと真ん中に置くと、そこにはもしかしたらチッタさんみたいな装置が1つ機能的に関わり合いもあるやもしれないし、恐らく日本代表を牽引するヘッドは川崎市在住の多分、勝君。御存じのようにブレイクダンスといえ、知的障害、精神障害も含めたプレーヤー、並びに足のあるなし、いわゆる身体的な欠損のある方も、今や1つのレギュレーションになっているじゃないですか。何か、この概念は分かりましたと。じゃあどうするかという話の中で、1つ次世代的な目線として、例えばブレイクダンスみたいなものをパリへのかけ橋として取り入れてみるみたいな方法論も1つ提案としてはあっていいかなと思いました。

【福田市長】 ありがとうございます。

【須藤委員】 偏った意見です。すみません。

【福田市長】 いえいえ。本当におっしゃるとおり、ブレイクダンス、川崎のこの周辺が非常に聖地化しているというところもありますし、こういうあるものというのをどうい

ろんな形で結びつけていくのか。

【須藤委員】　そうですね。彼、世界チャンピオンですから、今ね。先日もバッハさんに呼ばれていましたしね。

【福田市長】　意外と資料2、3、4のところささっと済んでしまったので、せっかく皆さん、すてきな御意見をたくさんお持ちの方ですので、あと10分ほどございますので、この際、あるいはこのコロナ禍でもこんな取組をやっていたよとか、共有したいことというのがございましたら、ぜひ御発言いただければと思うんですが。

今日、大塚さんのところから金子さんが見えになっていただいていますけれども、何か今日の感想でも結構ですし、おじさん、おばさんたちがびっくりするような御発言を。

【大塚委員代理（金子）】　今日はありがとうございます。大塚の代理で参加させていただきました。毎回すごく面白い活発な活動をされているというのは大塚から聞いていたんですけれども、ここまで具体的に進んでいるところまで聞いていなかったもので驚いているのと、あと私としては資料1にあった1番目のバリアフリー情報発信のほうですね。3年にかけて私も現場で立ち合いながら調査をさせていただいていましたので、今年はこんな形で、コロナ禍の中で飲食店さんのほうもなかなか厳しい状況が続いているかと思うんですけれども、一方で車椅子ユーザーの方であったりとか、移動制約者といわれている方たちも外出を少し控えてしまっているようなところが今あるので、そこで止めてしまうことなく、今までの外に外にというところで、飲食店さんのほうも心構えを、またしっかり持ち直していただけるような情報発信の仕方をこちらでサポートしていくのはすごく必要かなと思っています。今回1番のほうでバリアフリーの情報発信と、あと店舗さんと御一緒にやっていくという話がありますが、特にこれから、パのステッカーを貼っていただいているところがこれだけある中で、まだまだバリアフリーの実際の具体的な情報を出し切れていないのが現状で、パのステッカーを貼っていただいているということは、これから何かやってみたいと思っていらっしゃると思うんですけれども、じゃあ実際に何をしたいのかとか、どういう情報を出していいのかというのが、なかなかゼロベースだと、そもそもどういう心持ちで出していいのかというのが分からない飲食店さんがすごく多いと思うので、さっき杉山さんからもコメントがありましたが、セミナーをやってみるとか、オンラインでもどういう形でバリアフリーの情報を発信していったらいいのかとか、どういう心持ちでいたらいいのかとか、すごく簡単なことからできることはたくさんあると思うので、インフォシートが、お店さんのほうから作っていただくというときも、こういう

ものが1つあるだけで取り組みやすいかなと思います。

【福田市長】 ありがとうございます。

これ、それぞれの委員さんから頂いたプロジェクトというのは実に多くて、今の1番の話も、杉山委員や大塚委員や中澤委員さんもそうですし、何かいろいろな方が加わっていただいでできたプロジェクトで、2番目のトップアスリーの助成事業も中森顧問から頂いた御意見がこうなっているしとか、あるいは3番目のやつもあれですね、ユニバーサルなところですけども、ユニバーサルツーリズムの話も、実はJリーグでJリーグアウォーズを頂きました。いつだったっけ、あれ。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 4、5月のシャレン！アウォーズの中で、チェアマン特別賞というのを頂きました。

【福田市長】 というような形で確実に取組がいろいろなところで評価されてというふうなので、なかなかそれも知らしめられていないのがちょっと残念ではありますが、こういう形でアイデアが形になってきている。先ほど成田委員長からもお話があったように、パの話が出てきて、ちょっと浸透してきたけれども、まだまだということもあるので、さらにこの取組を深めていくという意味では、さっきの推進協議会もそうですけれども、具体的にもっとやれることというふうなのが、進化させていかなくちやいけないものってたくさんあると思うので、ぜひ、これはまだ始まったばかりと思って引き続き取り組まなくちやいけないなと思っております。

成田さん、まとめていかがですか。

【成田共同委員長】 今日もいろいろな意見が出て、私もすごく勉強になることが多かったです。ありがとうございました。

【福田市長】 ありがとうございます。

その他。どうぞ。事務局からよろしいですか。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】 事務連絡というか御相談といふかなんですけども、資料の4枚目の要綱、本会議の要綱がございますが、実はこの推進フォーラムと呼んでいますけれども、こういう堅い名前になっております。このフォーラムなんですけど、4条に開催期間というのがございまして、平成27年10月1日から平成33年3月31日、要は来年の3月までということになっております。ただ、オリンピック・パラリンピックが1年延期になってしまいましたので、私どもといたしましては、この会議を、要綱を改正してもう1年皆さんに、またお付き合いいただければと考えて

おりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【福田市長】　　ということは令和4年の3月31日まで、この会議は続くということで皆様の御理解を頂きたいということによろしいでしょうか。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　はい。

【福田市長】　　これは皆様、よろしゅうございますでしょうか。よろしくお願いいたします。

ほか、何かございましたら。よろしいですか。

【中森顧問】　　1つ。

【福田市長】　　どうぞ。

【中森顧問】　　イギリスパラリンピック委員会の事前視察で、具体的に日は載っていませんけれども、それまでに何回か来られますか。ペニーさんとか。

【鴻巣オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　お答えさせていただきます。オリンピック・パラリンピック推進室の鴻巣と申します。

本来でしたら1月に1回ぐらいお出でになっていたところなんですけれども、この間の3月に直前に最後の最終視察を行われるというところで、あとそれから事前キャンプのプレですね、プレの事前キャンプを行う予定というところがございましたが、コロナの関係でぎりぎりキャンセルという形になりましたので、それ以降は今のところはオンラインですと会議を続けているところです。それでイギリスのほうも、9月ぐらいまでBPAそのものが、BOAも含めてなんですけれども、休業期間、イギリスが11月ぐらいまで全国的に企業に対する休業補償をするというところもありまして、まだ全スタッフが出社していないと聞いております。

【中森顧問】　　分かりました。

【鴻巣オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　ですので年内ぐらいから、また視察が、イギリスのほうから日本に来られるようになって、またこちらから向こうに帰ることがコロナの関係で検疫上できることになれば、年内、年明けぐらいからいらっしゃるといようなふうには聞いております。

【中森顧問】　　いや、ちょっと話題を出したのは、このペニーさんとかポールソン博士と、やっぱりかわさきパラムーブメントの取組について、ちょっと意見交換してもらいたいとか、ちょっと評価してもらいたいとか。イギリスがパラリンピックの発祥なんです。ヨーロッパはやっぱり男女参画であるとか、市民の参加とか、そういう意識は非常

に進んでいると思うんです。日本はやっぱりまだ追いついていないと。そういう中でイギリスのこのお二人というか接点ができているので、より皆さんも疑問を質問にして聞いていって、共生社会とは何かとか、そういった部分まで、ちょっと突っ込んでできるかなという気がします。だからスポーツを通してやってきたので、そういう機会をぜひ活用してもらいたいなと思って、以上です。

【福田市長】 ありがとうございます。多田委員どうぞ。

【多田委員】 今回もC o l o r sかわさきの2020の御案内をお配りさせていただきました。C o l o r s展、今年3回目になりまして、この会議の中でもいろいろ御意見を頂きまして、そして改善なども進めてまいりました。チラシと報道の投込み資料を同封しておりますので御覧いただきたいと思いますが、今回はコロナの影響を受けまして、協力していただける施設ですとか学校のほうに、この日程でできるかどうかまず確認いたしました。皆さんが、むしろそういう機会があつて励みになるのでぜひやっていただきたいと、予定どおりに開催いただきたいという大変積極的な反応を頂きました。

そして作品の規格については、今までは1つの大きさを画一的だったんですが、今回はもう少し参加しやすいように自由なスタイル、小さい作品も用意したということで、例年に比べてかなりたくさんの方に応募を頂きました。

それから販売支援という形で御案内をしまして、いろいろな人に見ていただきたいということで巡回展も昨年からは始めたんですが、今年はコロナの影響で巡回展ができません。

その関係で、ミューザのホールで行うこの展示会の模様を、後日、私どものパラーツのホームページから、作品や展示会の様子が閲覧できるような形で配信をして、会場に来られない方、巡回展に行きたかったけれども今回来れなかった方含めて多くの皆さんに作品に触れる機会を提供していくなど、それらが今年の工夫点ということで、この日程から始めさせていただきます。

以上でございます。

【福田市長】 ありがとうございます。

ぜひいらしていただければ、すてきな作品がたくさんあつて、私も何点か購入いたしましたけれども、非常にすてきで、私の今、執務室のところに1枚飾ってあるんですが、とってもすてきな作品で。よろしゅうございますか。

【須藤委員】 ちょっとだけ情報共有、よろしいですか。

【福田市長】 どうぞ。

【須藤委員】 すみません、何度も。冒頭に山崎さんがおっしゃっていた、これから53のコンテンツをいろいろYouTubeで配信していくという流れ、山崎さんのお話にもありましたけれども、今後、来年以降も、リアルとバーチャルといいますか、オンラインの併用というのは、多分マストなインフラといいますか方法論になろうかと想像しています。直近はハロウィンがあるようなんですけれども。

実は今月末に私ども、1週間、今まで渋谷のヒカリエの会場にお客様を集める形で、期間累計で7万人ぐらい集まるようなイベントを今年は全部100%オンラインにして展開したんです。ちょっとこれ、皆さんにぜひ共有したいと思うのは、以降、いろいろな企業や行政から、そのときのありさまにおいていろいろなお尋ね、お問合せを頂いております。一言で言うと、オンラインは費用がリアルなイベントより安いよねっていう、この前提での御相談がほとんどなんです。これはやってみた実績を基にした1つの意見ですけれども、基本は同じかそれ以上にかかります。これは当然、技術の秒針月歩で、もうすぐにでも追いついていくのは、明日かもしれないし、半年かもしれないんですが、現状ある仕組みとオペレーション方法を前提に考えると、リアルなライブを同時に配信するという要素と、撮ったものを流すというのは若干異なりますが、この同時に配信するということをもってすると、イメージとしては当初の予定よりもややかかるというぐらいな共通認識が我々の実感でした。

ちなみに実績値で言いますと、1週間の間に1コンテンツ、1時間半のシンポジウムを80コンテンツ配信しました。期間累計のアクセス数というのが大体现状3万6,000アクセス。80で割っていくと、1個当たりのリーチ数というかお客さんのアクセス数って、一番低いところで100、多いところで千何百、これ、YouTubeのビューワー数で言うと丸が全然足りないんですよ。だがしかし、一方、配信した会場のスペースって大体これぐらいでした。これぐらいの部屋を4分割して、4つのスタジオから同時配信したんですけれども、じゃあ1週間でここに3万6,000人の実数を集められるかという数字を比較すれば、決して低くない。かつ今後活用できるという可能性も考えれば、やってみた価値はあったかなと。今、真っ青になっているんですけれどもね。そろばんのほうで。しかし1つここで共有として、今後パラレルで行われるであろう配信について、1つコストがリアルより下がるという認識は、いま一度脇に置いて、同じようにかかるかそれ以上だという共通理解はしておかれるとよろしいかなと僭越ながら思いましたので、情報共有まで

でした。

【福田市長】 ありがとうございます。

実は私たちの川崎の国際環境技術展というのを毎年やっているんですけども、今度はオンライン展示会をやるということなんですが、オンライン展示会ってやっぱり、今、須藤さんが言われたように、決して安くならないんですよ。だから非常に大変だなんて今思っているんですけども、でも今までリーチできなかったところまでリーチできるというのは、それはまた新たな価値をつくっているのです。

【須藤委員】 いや、おっしゃるとおりだと思います。

【福田市長】 それはすごいと思います。多田さんのところの東京交響楽団ですけども、あそこも結局オンラインコンサートを開催して、客を入れなくてニコ動で配信したんですよ。ニコ動で配信したら、結局あれ、何万アクセス、10万人でしたっけ。

【多田委員】 20万。両方で20万です。

【福田市長】 20万人。20万アクセスで見られているというと、一体あの2,000席のコンサートホールに、椅子の上に何十人が縦に座っているかのような感覚だと言っていましたけれども、本当にでも東京交響楽団を聞きたくても地方にいるからなかなか来られなかったという人たちに新しいファン層を開拓できているというのは、何か今まで制限されていたところを超えてくるんじゃないかなと。先ほど土岐さんが言われていましたけれども、駄目だという苦しみの中から絞り出すものって、何か面白いものが出てくるものですね。

いや、今日は本当にありがとうございました。お忙しい中、来ていただきましてありがとうございました。成田さん、最後、一言締めていただきたい。

【成田共同委員長】 大丈夫です。ありがとうございました。

【福田市長】 ありがとうございました。

【成田共同委員長】 またよろしくお願いします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】 それでは、これもちまして会議を終了とさせていただきます。

後で議事録のために委員の皆様には発言内容の確認のメール等が行きますのでよろしくお願いします。本日はどうもありがとうございました。

以上